キョウコ・モリの祖国日本――新移民の立場から

渡　辺　佳余子

キョウコ・モリは、1957年神戸に生まれた。神戸女学院大学に2年間在籍後、アメリカ・イリノイ州のロックフォード大学に編入学をし、ウィスコンシン大学の大学院に進学した。以来、アメリカに在住し続けている。セント・ノーバート大学で英文学助教授として教鞭を執る傍ら、作家としての活躍を始めた。現在は、マサチューセッツ州ケンブリッジに住み、ハーバード大学でクリエイティブ・ライティングを教えている。

複雑な家庭事情から逃げるように日本を離れたモリは、著作や自伝に書かれている彼女の心境からは、今後も祖国へ戻るという気持ちはないように思われる。1993年に発表した処女作『シズコズ・ドーター』（*Shizuko's Daughter*）は、同年のニューヨーク・タイムズ・ベスト・ブック賞を受賞し全米で大きな反響を呼んだ。この処女作が日本で出版されることになったとき、日本や日本語を嫌っているように思える彼女は、自作の翻訳を拒んだ。したがって、他者が訳すことになった同書ではあるが、日本でも多くの読者が感銘を受け、1999年には文庫化されている。

1995年には、第2作目となる『めぐみ』（*One Bird*）を出版し、「前作を超える素晴らしいストーリーと文体！」とニューヨーク・タイムズなど各紙で絶賛された。同書も翌年、処女作と同じ訳者によって翻訳され、1999年に文庫化されている。さらに1997年には、日本とアメリカを比較している比較文化論と言える『悲しい嘘』（*Polite Lies*）を出版した。同書は、前2作とは別の訳者により1998年に翻訳されている。本稿では、このモリの比較文化論『悲しい嘘』を中心に、彼女の小説や詩を参考にして、モリがどのように祖国日本を見ているのかを探る。

1．トランスナショナル・アイデンテイテイ

1）故国を捨てた新移民

アメリカにおける1965年の改正移民法の結果、70年代以降にはインド・パキスタン等の南アジア圏、ヴェトナム・カンボジア等の東南アジア圏からの移住者が増え、80年代以降はこのような新移民たちがアジア系人口の過半数を占めることになった。このような新移民の中には、多くの才能あふれる作家たちがいる。彼等は、かつての旧アジア系移民とは違い、よりよい生活を求めて移動を続け、自己のアイデンティティについても流動的に考える傾向にあるようだ。[1)]

キョウコ・モリもこのような新移民の一人であるといえよう。彼等の流動的なアイデンティティに対する考えを象徴しているように思えることとしては、彼等がコミュニテイへの帰属意識を持っていないことが挙げられるだろう。キョウコ・モリの日米比較文化論『悲しい嘘』（*Polite Lies*）[2)]に登場する彼女の友人がすべてアメリカ人であることからも、モリの生活している周辺には、日本人の姿は見えない。そのため、モリは、アメリカ人の間でアメリカ市民として生きているといえる。この文化論やモリの自伝『水の夢』（*The Dream of Water*）[3)]に書かれている内容からは、モリが日本人であることを嫌い、過去の忌まわしい思い出のために、日本は、忘れ去りたい国でさえある

ことがわかる。日本を離れた旧移民たちが、望郷の思いで帰国を切望していたことを思えば、モリが日本へ帰ることを強く拒否している姿は、新移民モリの特異な立場を浮き彫りにしている。

『水の夢』を書評したジョン・バーナム・ショーツ（John Burnham Schwartz）は、モリへの「日本にしばしば帰るのか」という質問に、彼女が「いいえ」「いつか訪問したい」と答えて、「帰る」という言葉の使用を避けたことに注目している。そして、ショーツは、モリの「訪問者」「旅行者」であると主張する姿は、故国に対する挑戦的、また、一層過激な攻撃的ともいえる態度に見受けられると述べている。アメリカ人男性との13年間の結婚生活を清算し、子供も持たなかったモリにはアメリカにおける家族はいない。しかし、彼女は、大学の専任職を持ち、作家としての活躍も顕著であるから、帰属意識は、日本ではなくアメリカにあるだろう。したがって、日本に生まれ20歳まで暮らしたモリではあるが、日本人としてのエスニシティを自らの意思で超えているといえる。

このように、モリが「帰国」という言葉を避ける大きな原因のひとつは、彼女が、日本という国の特質や風土が、母を自殺に追いやったと考えていることにある。モリが12歳のとき、母親がガス管をくわえて自殺し、父親は愛人関係にあった女性とすぐに再婚した。自伝には、実母の死から日本を脱出するまでの８年間に、父親と継母から受けた精神的、肉体的暴力が赤裸々に描かれている。モリは、彼らとの確執が繰り返される悪夢のような日々から逃れるために、母国を捨て去ることを選んだのである。

２）旅行者としてのモリ

自伝の最終部でモリは、自らを「母が自己の喪失感を生かして、より大きな世界へと解き放した娘」と呼び、「世界中どこにでも行けるし、母と同じ喪失感を覚えることはない」と言う。母は娘に「移動し続ける」ことを望んでいたと思うモリは、今後も世界を自由に飛び回っていくだろう。旅人としてのモリについては、リーラニ・リンダ・ニシメ（Leilani Linda Nishime）が、『水の夢』を旅行文学として分析した上で、モリのようなアジア人をトランスナショナルな存在として定義している。[4] このような存在であるためには、自由に旅を繰り返すという前提があり、日本とアメリカを往復しているモリもその資格があるとされている。しかし、モリの小説は彼女の少女時代を思わせる主人公の成長物語であり、自伝の大半は、父親と継母への批判であり、比較文化論『嘘』においてさえ、20年に及ぶアメリカ暮らしへの言及はほとんどない。『嘘』の「言葉」という章では、アメリカに移り住んでから「日本へは５回だけ行った」「用事がらみの短い滞在…自分からすすんで行ったわけではない」とあり、ニシメのいうトランスナショナルな存在であるためには、より積極的に日本を訪れ、日本のことを知ろうとしなければならないだろう。

たしかに、ニシメが指摘しているように、モリには、日本にだけ暮らしている日本人には、決して見えてこないようなことが見えるという強みがある。例えば、『嘘』の「学校」という章では、「文章の書き方をしっかりと学ぶ場のない日本」だから、「文章の勉強をするには、アメリカの大学へ行くしかなかった」と日本の教育システムについて批判している。二つの国で暮らした体験がこのように生かされている場合には、モリのトランスナショナルな立場が有効に役立っている。しかし、比較文化論においてさえ、アメリカについての長所や短所はほとんど書かれていないこと、日本を嫌っているためなのか、日本についての知識がなく、現在の日本が抱えているさまざまな問題が見えていないことなど、モリが真の意味でトランスナショナルであるためには多くの課題が残されている。

３）日本語と英語

モリのトランスナショナルな立場が影響を及ぼしていることとしては、言葉という問題が挙げら

れる。彼女は、久方ぶりに帰国して、母方の叔父と電話で話したときに、言いたいことをうまく伝えることができなかった。このときの気持ちを「感覚や直感に頼って思考している私には、日本語は向いていない」と自伝に書いている。日本語を避ける態度は、話すことだけではなく、書くことにおいても示され、アメリカで出版された処女小説が日本に逆輸入されたときも、自作の翻訳を拒んだ。

日本語を嫌うモリは、『嘘』の「言葉」という章で、「日本語を話すと疲れるから、日本には来たくない」と述べ、アメリカで日本語を話すように迫られると「パニックになる」とさえ言う。日本語には性差別があり、女言葉を話すと「知的で頭の切れる、決断力のそなわった人間」には見えないと主張し、同じ大学に勤務する日本人男性の同僚にも決して日本語で話しかけない。「対等」なはずの相手に「自動的に二番目の位置へ押し下げてしまうような言語」は使いたくないからだと言う。アメリカでの長い暮らしの後では、「もう英語でものを考え、判断するようになっている」と日本語への決別を宣言している。

モリが、自分の著作をすべて英語で書いていることは、アメリカ人読者を対象にしているのだから、日本語に訳すことは念頭にはなかっただろう。モリの小説の設定は、日本ではあるが、英語で書かれているのだから、アメリカ文学ということになる。しかし、一方では、英語で書かれているものの、設定だけではなく登場人物もすべて日本人であることから、日本文学ともいえるものである。例えば、自伝の冒頭は、「1969年、３月16日、結婚生活が終わった晩に、父のヒロシは、キッチンの隣の小さな部屋でいつものように寝ていた」と、母が自殺した日の夜の場面になっている。隣には、最上の着物を着せられた母の亡骸が横たわっているという鮮烈な書き出しをして、最後は、1990年、研修旅行を終えて日本を離れる空港で、継母が持たせた贈り物をごみ箱に投げ捨てるというモリの行動描写で終わる。この始まりと終わりに象徴されているように、自伝の内容は、自殺した母をいかに恋しく思っているか、父や継母をいかに憎んでいるかに終始しており、英語で書いてあることを除けば、日本の私小説のようである。

比較文化論『嘘』においても、同様なことがいえる。すなわち、「故郷ではない」「旅先に過ぎない」と言って、日本を拒否するモリであるのに、作品の中では、日本のことだけを書いているという矛盾が生じている。日本人でありながら日本語を書いたり話したりしない一方で、モリが英語で書き続ける世界は日本のことに限定されている。このように、日本とアメリカのどちらに属しているのかが不明瞭な文学的立場が、エスニシティを超越していることになり、この点がモリをトランスナショナルな作家にしているのではないだろうか。

２．母の自殺からの旅立ち

１）癒しとしての書くこと

モリが、アメリカ市民となってからも、日本における悪夢のような過去にとらわれ続けていたであろうことは、小説や自伝に、故郷神戸のことばかりを書いていることに表れている。壮絶な親子の確執の和解を試みたのは、父の方からであった。ヒロシがアメリカへの海外旅行の途中、娘に連絡しニューヨークで親子は再会する。このことがきっかけになってか、モリは翌年、勤務先の大学からの研修旅行先に日本を選び、13年ぶりに日本へ戻った。そして、日本での７週間の滞在の印象を過去の記憶と織り交ぜながら、自伝にまとめている。自伝の最終部でモリは、神戸の山々、海、町並みを愛してはいるが、父の暮らす町に数週間以上滞在することは耐えられない、今回の訪問で「どんなに時間が経っても、父を許すことはない」ことを確信したと宣言している。

父や継母への憎しみと同様に、母の自殺は、モリにとっての精神的なトラウマであった。母が生きていくことを拒否した日本を、外国から観察した結果、母の自殺の原因のようなものが見えてき

たのではないだろうか。モリが、36歳のときに自伝的小説『シズコズドーター』[5] を出版したことは、彼女が過去の忌まわしい体験について、ようやく「語る」ことができるようになったことを示唆している。この小説には、母の自殺を乗り越えていく少女の、希望に満ちた未来が描かれており、モリもまた母の自殺から立ち直ることができるようになったのだと思われる。

このように、モリが「書く」ことで、母の死や、父や継母との確執という過去から徐々に解放されているということは、創作という行為が、モリにとっての心の癒しになっているといえる。第2作目の小説『めぐみ』[6] の主人公めぐみの母親は、家庭を省みない夫に愛想をつかして実家に帰るという設定だが、自殺をすることはない。このことにも、モリが母の自殺からさらに解放されていることがわかる。『めぐみ』でも、孤独な少女が、野鳥の世話をすることで、人生に愛や希望が持てるようになる。

モリの自伝は、二つの小説に続いて執筆されている。60年代以降の女性の自伝については、水田宗子が、「自己探求の手段」と定義し、女性たちが「自己を見つめることを通じて女性とは何かを明らかにしようとした」[7] と述べているように、モリもまた、「自己探求」を試み、女性の抱える問題とは何かを分析しようとしたのであろう。モリは、自伝の中で、母の自殺について冷静な分析をしている。彼女は、自伝の執筆を通じて、父と母の関係を振り返り、母のような悲惨な人生を女性たちが繰り返すことがないようにと訴えている。その上で、母や自分を含む女性たちが、どのように生きていったら良いのかを探ろうとしている。

2）女性の犠牲の上に成り立っている日本

モリの父のように仕事一辺倒で家庭を顧みない男性は、モリが育った世代には、当たり前の存在であったといえる。妻たちは、モリの母タカコのようにひたすら忍従を迫られる。モリは、『嘘』の「女の居場所」という章で、父の妹である叔母と同年代の女性たちについて「お皿も洗わなければ、お茶を飲むのにお湯もわかさない」男性の傍らで暮らしてきたと指摘している。犠牲になった女性の象徴的な存在といえるのが、タカコであり、「涙」という章では、「自殺する前の数年のあいだ、ずっとひとりで涙をこぼし続けていた」とあることからも、タカコが一人で堪え忍んでいたことが明らかにされている。

「家族」という章では、モリは、母が、ガス管をくわえて死んでいる姿を発見したときも、「私は泣かなかった。母がどんなに不幸せだったかを知っていたから」と、当時を振り返る。モリは、結婚生活における不幸に堪えられなくなって自殺をした母のことを思うとき、日本の女性たちの、結婚生活に不満を抱きながらも、何も変えようとしていない姿を批判する。「からだ」という章で、結婚は、日本女性の「人気の職種」「みんなが喉から手が出るほどこの仕事をほしがっている」と皮肉を言い、結婚をしないと、「人間として生まれもった役割をきちんと果たしていない」と見なされることに対して、「こうした汚名が女性に注がれる現実に胸が痛む」と、日本のゆがんだ結婚観の犠牲になっている女性たちに同情する。

さらに、同じ章で、モリは、日本の結婚した女性たちが、必ずしも幸せではないという現実を指摘し、モリと同窓の「教養も豊かで率直にものを語れる」「人生に対して何も求めずにいるような人たちではないはず」の友人たちが、「夫からは何も得られないままじっと我慢している」ことを不思議に思う。その上で、「象徴」という章で、日本の育ちのよい女性たちの「小鳥の鳴くような声」やこどもじみた格好に言及し、理想的な女性が「おとなしい妻、男性に対してこどものように素直に従う人」であり、魅力的な女性が「成長の止まった人」であると、男女の役割について未成熟であり続ける日本について辛らつな批判を展開している。

モリは、「からだ」という章で、棺のなかの母を見たときに、「自分に言い聞かせた。男の人に幸せにしてもらおうなんて思っちゃいけない。自分の力で幸せになろう」と、母の自殺を契機に自立

した女性になることを決意したと述べている。自伝で、モリの母親は、40歳近くになって、自分の人生が「次から次へと無意味なことに犠牲を払ってきた」と思うようになったと述べられている。モリは、母のような日本の女性たちが、自分を殺して生きていかなければならないという日本の現実を受け入れることができなかった。このようなモリであるから、「わが家」という章で、「教養豊かで自立した女性のことを認めようとしない社会」である日本から「抜け出してしまいたかった」と、日本を脱出した経緯について述べている。

3）女の居場所

『嘘』の「女の居場所」では、日本の女性が「家族を支える人」として「懸命に働き、数えきれないほどの犠牲を払うよう期待されている」と述べられ、女性の生き方について論じられている。『めぐみ』では、家政婦や奴隷のように家事に追われている近所の家の主婦に対して、「明日の朝は5時か6時に起きて、終わりのない家事をまた一から繰り返す」ことに、めぐみが、「身震い」し「自分の家の奴隷にでもなったように明けても暮れても同じ雑用をしつづけるくらいなら、死んだ方がましだ」とさえ思う。モリは、家事に一生を捧げているような日本女性たちの発展性のない生き方を批判している。日本では、女性の居場所は「いつでも家のなか」であり、このような状態に耐え切れずに自殺した母とは「違う人間になりたい」と、自立した女性として生きる決意を語る。

モリが、女性の生き方への答えを得ることができたと思ったときのことが、「からだ」という章で語られる。ウィスコンシン州北東部の島で、ビーズを使って物をつくる、一週間の女性だけの工芸スクールに参加したとき、モリは、女性の連帯感を抱くことができた。子供のいる既婚者がほとんどの40〜60代の12人の女性は、夫や子供の話題を持ち出すが、モリは「みんなが純粋に自分のためにここにいる」からいつものように腹がたたない。モリが夜中に目が覚めると、女性たちのいびきが聞こえ、幸せな気分になり、皆が眠っていると思うと「とても落ち着き」、「わたしたちはともに何かを学んでいるところだった」と述べる。このモリの言葉は、世界中の女たちへの呼びかけのように思える。エレーン・ショウォルターの『姉妹の選択』8章「共通の糸」では、アメリカ女性の文化と著作の共通の糸、その象徴としてのパッチワークの意義について述べられ、繋ぐこととパッチワークは女性の美学や連帯、女性にとっての政策の比喩になったことが論じられている。また、実際にキルト会が、女性たちの情報交換の場や政治的な問題を論じる場にもなったことが述べられている。[8]「からだ」という章で書かれているのは、キルトではなくビーズの会であるが、モリの抱いた連帯感は、同質のものである。

モリの母、タカコも近所の人たちに刺繍を教え、小学生であったモリを美術館に頻繁に連れて行ったことなどから、芸術に感心があった女性のように思える。モリは、母が、プロになって追求することができるような芸術や職業を持っていたら、もっと幸福であったのではないか、そうすれば人生が無意味であったと急いで結論を出してしまうこともなかったろうと、自伝で述べている。

家事に埋没して無意味に生きるのではなく、自分の居場所を探していくことを提唱しているモリ自身の居場所については、『嘘』の最終章、「わが家」で論じられる。モリは、わが家を「印象派の画家たちの描く風景」の中にあるとして、アメリカの美術館をめぐりながら、「母が教えてくれた愛すべき美しさ」の間を歩く。さらに、「言葉や手紙、本もまたわたしをわが家へと運んでくれる」「これからも本を読んでいこう、わが家へ帰るために」と述べ、モリにとっての「家」が現実の家庭の中にはないことが明らかにされる。また、同じ章では、モリが、日本を飛び出した年の夏に、サンフランシスコの海岸で打ち寄せてくる波を見つめながら「いま目の前にあるこの水はぐるりと世界中をとりまいている。きっと、どこで暮らしてもかまわない。わたしは母のことを忘れるために家を出たわけではない」「母に近づいて行くためにあの家を出た」と思ったときのことが書かれている。「あれから20年、この気持ちはいまも変わらない。たとえ、言語は違っても、わたしは母

の言葉を語りつづける」という言葉でこの文化論が閉じられる。

このモリの宣言には、日本やアメリカという場所にはこだわらない、神戸の海とサンフランシスコの海はつながっているのだ、というトランスナショナルなモリの立場が浮き彫りにされている。そして、アメリカに暮らしていても、日本の「家」というシステムの中で犠牲になって自殺していった一人の女性の声を世界中の女性に語りつづけていきたいというモリの強い意思が表れている。

3．新移民から見た日本

1）父権主義の日本社会と女性蔑視

モリは、日本の社会構造や男女の役割に対する因習的な考えを批判する。『嘘』の「家族」では、モリは、「父の影を見ることはほとんどなかった」と言い、週末も家に寄りつかず、大学時代の友人とラグビーやゴルフをして遊んでいた父ヒロシが、仕事を優先するサラリーマンであるだけではなく、家庭を全く無視し続けた父親であったことを明かす。

このような父親からの愛情を感じられなかったためか、モリは、自伝や小説で、父と父方の親戚を、感性のない無機的な人物として描き、母や母方の親戚を感情豊かで、自然を愛する心優しい人物として描くことが多い。自伝に登場する、父の父であるタツオが、モリの描く、人間味に欠けている父方の親戚像の典型的な人物になっている。タツオは、女性を虐げる父権主義の頂点に立っているような人物であり、父の妹である叔母アキコと娘のカズミを奴隷のように扱い、二人の家事が気に入らないと「ただ飯食いの居候のくせに」と罵声を浴びせる。そのため、アキコは、自分の父、兄ヒロシ、そして夫をも含む三人の男性が皆感性に乏しい人であることを嘆き、「息子がいなくて良かった」とモリに打ち明ける。

自伝では、父は、モリに泣いて謝ることを要求して暴力をふるい、母タカコは娘のことなど愛していなかったから自殺したのだと、言葉の暴力も浴びせる。モリが謝っても、心がこもっていないと、壁にモリを叩きつけ顔を激しく叩くために、モリの頬には父親の指のあとが赤く残るほどである。女性がいなければ、何一つできないヒロシは、モリに暴力をふるいながら、継母のミチコが家を出たら、「お前が家事をしろ」とすごむことからも、父にとって女性は、家事をこなしてくれる女中のような存在にすぎないことがわかる。

女性を家事労働者として見ている父にとって、女性はまた、性の対象物でもあった。父は女性にだらしなく、母以外の女性と関係を繰り返した。父の最初の愛人は、通った飲み屋の経営者で、母と結婚する前からのつきあいがあり、10年以上も関係していた。ミチコは、新しい愛人で、どちらかの女性が母に電話をしてきて、父の不誠実をなじるという修羅場があったことをモリは、母の泣いていた姿と共に思い起こす。モリにとっては、このような父が、性にだらしのない日本の男性を象徴しているように思えるのではないだろうか。

2）日本男性と性

性と結びついている日本男性については、『嘘』の「からだ」で論じられる。モリは、日本の男性が、タイに売春旅行に出かけたり、生のセックスショーを見に行ったりすることを批判し、彼らについて「たいてい中流階級かもう少し豊かな人たちだろう。わたしの友人たちは、そんな階級の人たちと結婚している」と言って、父の姿を重ね合わせている。また、「安心」という章では、モリは、「日本にいると他の人々ほど安心感をもてない。どんなに安全な国かはわかっていても……リラックスできない」と、身だしなみの良いサラリーマンたちが、のぞきこむようにしてＳＭ漫画を読んでいる姿は、モリの感じる恐怖のすべてが象徴されていると指摘する。

さらに、日本に滞在中、鎌倉行きの電車に乗ったとき、モリの「安心感を根元から切り崩すよう

なことがあった」と明かされる。モリの前に座っていた中年の男が、モリを舐めるようにして見つめながら、ズボンのうえから股をさするという猥褻行為をした。この「あまりにも破廉恥な」出来事については、しばらくは誰にも話せなかったのだが、思いきって話してみると、友人は、このことを「ちょっとした」性的嫌がらせとして、電車のなかでは「日常茶飯事」と言うことにモリは驚く。このような女性への性的な嫌がらせが蔓延している社会の根底にあるのは、男性であれば何をしても許され、女性は、ひたすら耐えていかねばならないというような社会の風潮があるためであると、モリは訴えているように思われる。

自伝で、モリに対して「お父さんを余りに厳しく批判するべきじゃないわ。奥さんに不誠実な旦那さんなんて大勢いるわよ」と言う母方の叔母のケイコが言い、モリは腹を立てるが、日本には、モリの父のように愛人を持つことが当たり前のように考える人は大勢いるだろう。父方の叔母アキコの夫も、ヒロシと同じように愛人を作り家庭に寄りつかずに離婚している。モリが、身近に「不誠実な夫」の姿を数多く見たことも、モリの描く日本の男性像に影響を与えているだろう。

3）沈黙と嘘で満たされている日本

『嘘』の「安心」において、モリは、電車内での中年の男の破廉恥な行為を振り返って、「今回のことでいちばん問題」になることは、「みんながだんまりを通したことだ」と述べる。彼女は、日本の女性たちが、沈黙のなかへ押しこまれていると感じて、本当に怖いのは電車のなかの「イカれた男たち」ではなく、周囲の人たちの「沈黙」であると指摘する。しかし、モリは、自分自身も日本で暮らすことになったら「みんなの見せる世間のための沈黙（ポライト・サイレンス）」を受け入れて、他の人たちと同じように黙りこむに違いないと思う。そして、「みんなに沈黙を押しつけたうえに成り立っている」社会に対して、「どうして怯えずにいられるだろう」と、日本への怒りを顕にする。恐怖を感じるときの「すべてのポイントは沈黙にある」ことを確認して、アメリカの都市を引合いに出しながら、そこには、「穏やかな見せかけや折り目正しい静寂（ポライト・サイレンス）」の奥に危険がひそんでいるようなことはないとアメリカを称える。このように、モリは、嘘がなく、沈黙をすることのないアメリカの「騒々しい都市にいる」と心が安らぎ、「重苦しいまでに静かだった自分の過去から解き放たれる」と言って、アメリカへの帰属意識を確認する。

こうして、日本社会に蔓延する沈黙や、文化論のタイトルとして採択した「嘘」に対して批判的なモリは、「隠しごと」という章で、日本における癌の告知を例にあげて、体裁を保つための隠しごとが、何をするにもつきまとってくると指摘する。「わたしがこの国を出たのは、…それに堪えられなかったから」と、日本から逃げ出した背景について語っている。さらに、最終章「わが家」で、モリの子供時代の家には、「悲しみ」「隠しごと」「嘘」があふれていたこと、母が、「円満な結婚生活を守るために悲しい嘘をつきつづけ」「くる日もくる日も、なんとかして嘘を本当にしようと必死になっていた」こととが述べられる。「嘘をつくのが嫌になったから、自ら命を絶ったのだ」と、母の自殺の原因を分析する。そのために、モリは、母が「悲しい嘘を拒むこと、こどもの頃の沈黙に別れを告げること、真実だけを話すこと」を自分に託したのだと言う。こうして、モリは、母の残したメッセージにしたがって、沈黙を破って率直に発言し、嘘や偽りのない誠実な生き方を選択していこうとする。

4．モリの問題点と今後

モリは、日本の社会構造や、男女の因習的で伝統的な役割について、手厳しく批判している。しかし、彼女は、日本の自然風景については、美しい思い出としてなつかしんでおり、詩人としての手腕を生かして、小説の中であでやかに再現している。例えば、『シズコズ』では、15章各章とエ

ピローグに様々な花が描かれ、『めぐみ』の主人公の少女は、毎年夏に母と実家に帰り、田舎の美しい自然に親しむ。

日本の自然に加えて、モリがなつかしんでいるのは、母方の祖父母との思い出とともにある日本の古き良き慣習である。『シズコズ』では、棟上式、葬式、結婚式など日本の文化が紹介され、詩集『フォールアウト』[9] にも盆踊り・地蔵・観音・友禅・蒔絵などが、注をつけられ紹介されている。同様に、自伝や文化論でも、日本の慣習が詳しく述べられている。しかし、見方を変えれば、モリの描く美しい日本の風景や古くから日本にある慣習は、アメリカ人を含む西洋人を喜ばせるような異国情緒を作り上げ、オリエンタリズムの香りを漂わせて彼らにへつらっているということになる。日本を嫌っているモリが、日本の一面だけを都合良く利用しているにすぎないともいえる。

さらに、西洋人が好むオリエンタリズムを大いに書き連ねているモリではあるが、また別に、モリの作品を最もアジア系らしくしている点がある。それは、モリが無意識にさらけ出している異様なまでの血縁への執着であり、このことは、移民の国であり、養子制度も発達しているアメリカでは、モリの示す血縁による強い絆は、アジア人の特徴として興味深く思えるに違いない。実際、自伝では、母タカコの弟のシロウとモリが雑談をしているときに、シロウが「ナガイ家ののろい」（ザ・ナガイ・カース）という言葉をだして、全員が「しつこい」（シツコイ）と自嘲的に認めている。遺言に「遺骨は実家の墓に埋めて、実家の墓に墓碑銘を刻んでほしい」と書き残すほどに、父の浮気を絶対に許さない母と、父と継母を憎み続けるモリもまたこののろわれた家系の一員である。

いずれにしても、『嘘』の「隠しごと」で、モリは「ふたつの文化をまたいで生きていくには、難しいことがたくさんある」と自己の立場を分析している。しかし、日米二つの文化を共有できるという恵まれた環境にもあるのだから、これからは、母方の血縁に固執するという狭量な気持ちを捨てて、トランスナショナルな立場をもっと有効に生かして欲しい。これまでの作品では、ほとんど取り上げることのなかった、日本人の眼で見たアメリカについて書いてくれることを期待する。さらに、モリが、日本滞在中に訪れた広島の原爆記念館の展示の仕方のあいまいさに腹をたてているが、このようなことは、日本で暮らす日本人には気づかないことである。これからも、日本の欠点を率直に述べて、嘘やあいまいさを嫌うモリならではの日本文化論を書いてほしい。

モリの今後に望むことは、父への憎しみから解放されることである。モリの自伝や文化論から、父もまた不幸な人であったように思われる。タカコは、夫が浮気をして以来、夫と寝室をともにすることを拒否し、子供の養育に埋没し、実家と異様なまでに親密に交際した。ヒロシは行き場を失い、一層仕事にうちこみ、愛人のところで精神の安らぎを求めたのであろう。『嘘』の「涙」という章には、モリの弟のジュンペイが、父の葬儀には参列者が600人もきて、弔辞を読んだ男性が壇上で泣き崩れ、「あんなにすばらしい人、他には知らない」と述べたこと、秘書や事務の女性たちも皆泣いていたために、もらい泣きをしたことを姉に報告している。このことは、モリの知る父の姿が偏見に満ちたものであったことを示唆している。母の妹のケイコは「お父さんだって幸せではなかったことを忘れちゃだめよ」とモリにさとす。新興宗教に身を捧げている叔母の陳腐な言葉ではあるが、真実を語っているだろう。叔母の指摘しているように、モリに欠落しているのは、「許す」という東洋的ともいえる姿勢である。

母の過ちをも認め、父を許し、血縁への異様な執着を捨てることで、モリは、とらわれ続けた過去の呪縛から解放されて、真の意味でトランスナショナルになれるだろう。その上で、日本とアメリカ双方の文化を伝達し、世界の女性たちが普遍的に抱える様々な問題を浮き彫りにし、新しい女性の生き方のようなものを探り続けてほしい。また、モリの作品に描かれた、日本の豊かな自然やそこに暮らす純朴な日本人の姿を通じて、20年前の古き良き日本を思い起こし、現今の日本や世界が抱える問題への答えを見つけることもできるだろう。モリの作品が逆輸入され、日本人読者が読むという過程を通じて、失われた日本の美をもう一度見つめ直すということもできる。モリが自己

の体験を交えて静かに語った私小説のような狭い世界が、アメリカと日本双方の国において、失われた過去を取り戻すことができるならば、モリの作品の果たす役割は大きい。また、西洋人の描く日本女性という定型的なイメージを打破するためには、率直で、嘘を嫌い、強い意志の持ち主であるモリは、新しいアジアの女性像の創造に貢献していくことだろう。

注

1）小林富久子、「移動・越境・混血――最近の日系女性作家における新しい主体意識」『アジア系アメリカ文学――記憶と創造』（大阪教育図書、2001年）、439頁。

2）Kyoko Mori, *Polite Lies* (New York:Henry Holt,1997).
『悲しい嘘』部谷真奈美訳（青山出版社、1998年）。以後、同作品は『嘘』と略記する。12章構成。引用の際には、各章のタイトルを「　」の中に記す。

3）Kyoko Mori, *The Dream of Water:A Memoir* (NewYork:　Fawcett Columbine, 1995).
『水の夢』と訳す。引用の邦訳は拙訳である。

4）Leilani Linda Nishime, *Creating Race: Genre and the Cultural Construction of Asian-American Identitiy* (Ph.D. Dissertation: U of Michigan, 1997), 119, 131, 134を参照。

5）Kyoko Mori, *Shizuko's Daughter* (NewYork:Ballantine Books, 1993).『シズコズドーター』池田真紀子訳（青山出版社、1995年）。以後、『シズコズ』と略記する。

6）Kyoko Mori, *One Bird*　(New York: Fawcett Juniper, 1995).『めぐみ』池田真紀子訳（青山出版社、1996年）。

7）水田宗子『フェミニズムの彼方』（講談社、1991年）。164頁。

8）Elaine Showalter, *Sister's Choice* (Oxford: Oxford UP, 1991).『姉妹の選択』佐藤宏子訳（みすず書房、1996年）。訳書、227頁。

9）Kyoko Mori, *Fallout* (Chicago: Tia Chucha Press, 1994).　モリが、1994年に、様々な雑誌に掲載された詩をまとめて、母に献辞している詩集である。日系三世のローソン・イナダは、「キョウコ・モリは真の詩人……わたしたちに新しい世界を見せてくれる……有り難うキョウコ・モリ！」と、述べ、詩集を絶賛している。